

第2回 介助つきコミュニケーション研究会 シンポジウム

大野剛資（司会）

それではこれからシンポジウムを始めさせていただきたいと思いますが、今、打ち合わせで通訳の説明を私からさせていただきます。このシンポジウムには少しスピードが必要なので、柴田先生のすごい速さの通訳になりますが、このことについてはまたあとで色々質問していただいて結構ですが、まずは僕たちの声に耳を傾けていただきたいと思います。特に今日の話は僕たちにとっては方法を遥かに超えた話ですので、方法の話は今までのところで一区切りついたということで、私たちの意見を今日会場にいる人たちには、わざわざ伝える必要のないことかもしれませんが、僕たちにはそういう場がありませんので、僕たちにはこの場を借りて社会に向けて僕たちの意見を訴えさせていただきたいと思っています。それではここからは私の司会でシンポジウムを始めさせていただきたいと思いません。僕は最後に自分の意見を言わせていただきます。

今日のシンポジウムの前までの時間は、本当に和やかに和やかに時が流れていて、僕はこの話をするのに少しためらいを感じるほどでしたが、やはりどうしてもこのことを言わないと僕たちは自分たちの存在を脅かされたわけですから、どうしても言わないといけないと思いますので、シンポジウムを始めさせていただきたいと思いません。シンポジウムと言ってもただ4人が意見を述べるだけではありませんが、それでもこうして大勢の人の前で僕たちが意見を言える貴重な場なので、どうか耳を貸していただけたらと思いません。

最初にまず、J. Oさんからお願いしたいと思いません。J. Oさんは元々はお母さんととても上手にコミュニケーションができますが、僕たちはこういう話題はできれば家族ではない人の方が家族の人とは違う社会的な発言がしやすいものですから、J. O君には柴田先生が筆談で話をしてもらうことにお願いしました。それではJ. Oさんからお願いします。時間は一人10分のつもりですが、それぞれ言いたいこともあるでしょうから、あまり気にしなくていいですが、一応、時間だけは上げてください。（タイムキーパーの方へ）よろしくお願いします。では、太田くん、お願いします。

J. O

それでは、僕は自分の意見を言いたいと思いませんが、J. Oと言います。僕は普段は50音表のボードで話していますが、この方法はまさに先ほどから話題になっている「日本流奈さん」の方法を真似たものなので、僕にとってはある意味で日本流奈さんは恩人とさえ言える人なのですが、こうしてなかなか理解されなかった彼のことがようやく日の目を浴びれるまでになったのも僕はちょっと嬉しい気持ちで今日の話聞いていました。

ところで今日、僕が一番言いたいことは、文章に書いてあるのでまずそのことを言いますが、僕はあの「植松聖」容疑者がどうして僕たちを殺す気持ちになったのか一番大きな原因は、日本にまだインクルーシブ教育が確立していないからだと思いません。インクルーシブ教育というのは最近流行るようになった言葉ではありますが、もともとは統合教育と言ってずっと昔から実践されていたことが、時代の流れの中で形を変えてきたものですが、インクルーシブ教育に関しては説明は長くなるので控えますが、例えばイタリアにはもう特別支援学校はありませんから、どんな子どもも地域の学校に行く体制が整っているということになります。

そういう社会が早く日本にも来てほしいのですが、何が言いたいかという、もし、小さい時から

僕たちときちんと時と場所を共有していたならば、僕たちのことがよくわかるはずですから憎いと思ってもまさか存在を抹殺しようとはまでは思わないのではないかということです。もちろん例えば僕が植松君をけちよんけちよんにやっつけたとしたのなら彼に殺意がわいてくるのもわかりますが、そういうことではなくて、ただ彼は「お前みたいな奴は生きていてもしょうがない」というふうにして殺すわけですから、そういう感情を抱くということはないと思います。

先生にしてはちょっと慎重ですが、さすがに僕も緊張しているので、確かめ合いながらいった方が僕もいいと思いますが。

ところで今日もう一つ文章に書かなかったことで僕が言いたいことは、みんな僕たちはちゃんとした気持ちを持って生きていることについてあまりにも世の中の専門家が情けないことを言っているというのは、世の中の人が大体分かっていることだと思いますが、僕が一番抗議したいのは、実は同じ立場の障害者に対してです。後ろに利光さんがいるはずですが、どこにいますか。あの人だけが例外で僕たちの言葉をまともに聞いた喋れる障害者はどこにもいないんじゃないかと言うことです。

僕は専門家はまだまあ仕方ないと思っています。どうせ自分のことではありませんから。僕たちの言葉を理解しない専門家がいてもまあそれは仕方ないかと思いますが、僕がとても悔しい思いをしたのは身体が不自由でもちゃんと喋れることのできる障害者があまりにも僕たちの言葉を聞かずに来たということですが、今まで聞かずに来たということについてはそれなりに大目に見てもいいかという気がしていますが、今回くらいはちゃんとその障害者たちは反省するとか僕たちの意見を聞きに来るとかしたらどうかというのが僕の意見です。

先生が（通訳が）非常に慎重なのは僕が爆弾発言をしているからですが、障害者の間に分断を持ち込むのか、J. O君はという感じがして、先生でもビビるのかとびっくりしましたが、これは軽く言っているので適当に聞き流してください。先生とは長いですから、こういう時に先生がビビるのが珍しいなと思ったからですが、今のように僕たちは相当に相手の気持ちを捉えながら話しているので、先ほどの鈴木先生の仰る通り、柴田先生なんてしょっちゅう「言え言え」と言う押しつけ的な空気を持っている面白い人なので僕たちもどんどん言いますが、今のは正しく先生がそこまで言わなくてもという気持ちが僕に伝わってきて、それでも僕は言わずにいられないことだったということになります。

そういう意味で僕はずっと障害者同士の理解が進まなければいけないので、その辺も含めて全ての人と同じ場所でもっと議論できることが必要ではないかと思っています。僕たちの養護学校では喋れることのできる子どもと喋ることのできない子どもはクラスも分けられてみんな別々にされてしまうからそんな今の時代があるわけですから全てを含めて本当の意味でのインクルーシブ教育が必要だと僕はつくづく思っています。

なかなかいいこと言ってるじゃん！みたいな感じもしますが、そういう意味で僕はこのシンポジウムではしっかりと共に学ぶことの意味を訴えたいと思いました。そこまでは少し世間に対する文句ですが、僕はとてもこの間、怖かったことがあります。

それは介助者たちの心のあり方についてです。先生とは一度病院で会って、先生が「今、その話をすると犯人の思うつぼになるから今はそれはまずいのではないか」と言われて、それはとても面白い意見だと思ったのですが、先生がまた動揺した面白い場面でした。僕は今回の事件の時に、一体周りの人はなにか面白くて僕たちの介護なんかするのかとしきりに聞いてみようと思ったのですが、先生は「今、すると結局あの容疑者の思うつぼじゃないか」と言われたので、僕は逆にだからこそ僕の立場で聞いてみようということにして話を聞いたのですが、先生も納得してくれたのは、やっぱり人は

きちんと人の命の輝きを探して生きているのだということがわかったので、先生もそこまで僕が言ったのを聞いてホッとしたみたいですが、ただただ人の本音を暴いてしまうのはまずいというのが先生の引いてしまう思いだったと思います。先生が僕の言葉を聞いてホッとしたのはそのところでしたが、僕もその言葉に辿りつくまで本当に辛かったです。

なぜなら目の前にいる人の心の中には本当はあの容疑者のような気持ちが眠っていて、うその顔で僕たちと付き合っているのかもしれないと思うととても不愉快だったので、僕の思いでそれを聞いたのですが、これは一か八かでしたが、やっぱり一人一人の心の中に見えるのは僕たちの心の輝きに目を向けようとする人の心の素晴らしさだったので僕は今回の事件は本当に怖かったです。ギリギリのところ色々な人と話をしてもう一度そのことが見つけられてとてもよかったと僕は思いました。

本当に色んなことを考えさせられた事件でしたが、本当に一番悔しいのは亡くなった人の命の問題ですが、最初の一人目としてはまずそのことは他の方が絶対に触れてくれるので、インクルーシブ教育や介護する人間の心の問題について僕たちが考えていたことを話させていただきました。

大野剛資

ありがとうございます。J. O君らしいユーモア、と言わずにこういうのは確かウィットと言ったはずですが、なかなかさすが純平くんの話を聞いたという気がしましたが、こんなふうに僕たちはこの事件にいろいろ考えさせられたのですが、J. O君の言うようにこの事件で傷ついた胸の思いをきっと一番今日話してくれるのはH. KさんなのでH. Kさんからお願いしたいのですが、最初にちょっとだけH. Kさんといっぱい練習した松本さんが最初の挨拶だけ指文字でしていただけますでしょうか。

H. K

こんにちは。私の名前はH. Kです。今日はこれから私がこの事件について感じたことを話したいと思うので、よろしくお願いします。

(通訳交代)

それでは、そのまま松本さんと話したかったけど時間が限られているので。だってやはり女の子の声で言いたいことなので、女の子の声ではなくなりますが、やはりちゃんと話すためには一定のスピードできちんと話させていたいただきたいと思います。私はこの事件の一報を聞いた時から胸が張り裂けそうな思いでしたし、先生と3日前に会うことがあったときに、何も考えなくていいかとわざわざ聞きました。それは考えると胸がいっぱいになるから、できれば今日のこの日の準備はしたくないと先生に言ったのです。それくらい考えたくないことなので、今日はその場で話すと言う約束で来ましたが、最初からそのことを考え始めてとても気持ちがふさいでいたのですが、やはりきちんと話したいと思います。

私がこの事件の話聞いた時、ああ、あの施設は私が入ってもおかしくない施設だったのだなあとということでした。私たちの間に変な違いをつけるつもりは一切ありませんが、今日、今ここにいる4人中であの施設に一番入りそうなのは私と栗山さんです。車椅子の人はまた違う施設がありますから。だから、私が殺されてもおかしくなかったんだという思いがして。怖くなったわけではなくて、私と同じ仲間があんなふうに殺されたのかということがとても辛くて辛くて。

世の中のニュースはとても冷たくて、何もわからない人たちが殺されたという言い方ばかりしてい

ましたが、それもまた悲しかったです。私はもし私が殺されたりしたら、お母さんが必ず私の素敵な思い出を世の中に語ってくれると思っていたのですが、先生もそのことをよく「僕たちの代わりにというのも変だけどお父さんやお母さんが思い出を語ることが一番なんだ」と言っていたので、朝日新聞に実名は出なかったけれど笑顔と一緒にお父さんの思い出話が出た時に、私も心からあの亡くなった方の気持ちがようやく伝わったと思った瞬間でした。

だから、私は今日どうしても言いたかったのは、私たちはちゃんとした気持ちを生きてきたんだということと、亡くなった人にもそういう素敵な人生があったんだということはどうにかして伝えてほしいということです。今日も新聞社の方がいらっしゃっていると聞いたので、私たちが話していると書かなくてもいいから、一言、あの人たちにもどんな輝かしい人生があったということで、もう一度この事件を見つめ直そうではないかという言葉、誰かが世の中に向けて発信していただけたらと思います。

私たちにとってはこの言葉がなかなか世に届かないことは知っています。どんなに頑張ってもこれは柴田先生が作ったと言われることも知っていますが、言葉だけは誰が言ったということは関係なく伝わると思うので、なかなかそういう言葉が語られないので、私はみんなが豊かな人生を生きてきたはずだという観点からの意見が欲しいと思っています。

どんどん気持ちが辛くなってくるのでこの辺りで最後にしたいのですが、私がどうしても辛かった時に仲間の作った詩がとても私の心を癒しました。今日のきんこん通信には詩を書いた仲間がたくさんいます。私は今回のことではたまたま詩を作りませんでした。沢山の人が亡くなった方をひたむきに思い続けて懸命に綴った詩が載っています。その詩こそが私は亡くなった方々を悼むのに相応しいものだと思うので、どうか意見とは別に亡くなった人を悼むために作られたいくつかの詩に目を向けていただきたいと思います。

先生も「鎮魂」という言葉を何度も繰り返し使ってその詩のことをブログに書いていましたが、やはり詩に込められたものは世間への怒りでもなんでもなく、ひたすら、亡くなった方を悼み追悼するための言葉ですから、そういう言葉がこんなにも沢山語られているので、その言葉だけでも世の中に届けられたらと思います。詩なら作者はいらないのかもしれないので、こんな言葉があるということだけで届いたら嬉しいなと思っています。

私たちの言葉が届かないということは今回のことで嫌というほどわかりました。先生も色々と頑張って色んな人と議論したそうですが、とうとう私たちにも言葉があるということが世の中に出たことは一度もありません。だから私たちの言葉があるかどうかの議論は、今回はまた先送りにされると思いますが、やはり仲間が仲間を思い作った詩は、言葉としてきちんと残るものなので、そういうものだけでもどこかで誰かに読まれ続けていただけたらいいなと思います。

以上で私の意見を終わります。

大野剛資

ありがとうございました。やはりH. Kさんならではのとても心のこもった意見で僕もとても胸を打たれましたが、次はS. Kさんからお願いします。S. Kさんの意見の中で僕が衝撃的だったのは、「僕こそが重複障害者だ」と言ったことでした。あの犯人が使った言葉は中途障害者でもなく、重症心身障害者でもなく、重複障害者でしたから。一番その言葉に敏感に反応したのは視覚障害があるS. Kさんだったのだと思いますが、その中で色々と考えたことがあると思うので、ぜひ、話を聞かせていただきたいと思います。

僕がわざわざ注釈することもないかもしれませんが、一言だけ付け加えておきます。S. Kさんは小さい頃、お姉さんが一生懸命手を取ってひらがなを教えていたので、大人になって名前が書けることが分かってからお母さんがもう一回全部のひらがなを教えたのでまた書けるようになっています。目が見えないので映像はないそうですが、手の動きで覚えられるそうでスラスラとひらがなを綴っていくので、ぜひそのところは疑わないで聞いてもらいたいと思います。S. Kさん、お願いします。

S. K

それでは僕は気持ちを静めるためにウォークマンをかけながら喋らせていただくのでお許してください。

僕があので事件の話聞いてもっとも衝撃を受けたのは、普段使われていない重複障害という言葉が使われたからでした。僕は知的障害と視覚障害の重複障害と言われて小さい時から重複学級で育ってききましたから重複という言葉はとてつ慣れています。学校の先生たちは優しくつたから、重複障害を差別的な言葉で使つたことはありませんが、世の中ではその言葉が差別的に使われることぐらひは知つていましたが、初めて、差別的に使われているのを聞いたので、それも驚きでしたが、やはり、そんなにまでして僕たちを攻撃しようとする人がいるということに大變な衝撃を受けました。

それから色々考えたのですが、僕は今回、2つのことが大問題だと思つました。それはまず、言葉があろうがなからうが、人の命に価値はつけられないということ、僕はたまたまこうして言葉があることをきちんと伝えることができたので、今、言葉がある人間として生きていますが、このやり方に出会えなければいつも口から變なことを言つている盲重複障害児だつたのですが、その僕の存在を認めるかどうかで人の価値は決まつていました。

学校の先生には優しい人が何人もいて、僕がちんぷんかんぷんなことを言うちよつと變つた子であつても心から僕を支えようとしてくれた人がいて、そういう心のあり方こそが世の中には必要だということがまず一番に言いたいことです。

だからそういう心のあり方をもう一度社会の中はどうやって蘇らせるかが大問題だと思つます。隣のJ. O君とは小さい時から同じ会で頑張つてきたので、J. O君の言つた言葉に心から共感したのは、やはり人の心の輝きを大事にする時にその人の能力は全く関係ありませんから、確かに僕は言葉があつたわけですが、全く言葉がないように見える僕をあんなに大事にしてくれた人々の心の在り方がまず世の中の土台になるものだと思つます。

そのこともまだちゃんと語られていないので、まず、そのことをきちんと世の中の人に納得してもらいたいですが、そこまでなら色々な人が語つていましたが、その先に僕が言いたいことは、そんな僕たちが実は言葉を持って今こうして話しているということです。

僕はきんこんの会にやまゆり園の人が来たことは覚えていますが、そのことはあまり触れない方がよいと先生はおつしゃつたけれど、今日は先生も言つたので僕も触れますが、僕たちの仲間の一人だつたということになります。確か2人の当事者が僕たちの会に参加したので僕たちの仲間ですが、その仲間が、言葉がない人として、沢山殺されたり傷つけられたりしたことは、やはり大きな誤りに基つた事件だつたと言いたいということです。僕たちにはちゃんと言葉があるので、そのことをきちんと理解していない世の中が、やはりまだまだ僕たちの存在を認め切れていないのだということ、僕はきちんと言いたいと思つます。

さつき、J. O君が喋れる障害者のことをきつぱりと否定していましたが、僕もその思ひは同じで、僕たちのことをきちんと語つてくれる人がどこにいるのかと探したら、同じ立場の障害者ですらその

ことを言ってくれないわけですから、やっぱりまだまだ世の中はこのことについては理解が乏しいのだなあと思いましたが、もう一つ誤解を恐れずに言いますと、一般の人たちにはわかりやすい話ではないでしょうか。

僕のような、話がわかると言われる前の僕のような人を大切にできる人は、確かに限られていますから、人数にしては少ない人たちのことになると思います。どうしてその人たちがそうなのか僕にはわかりませんが、一般の人は確かに喋れることがわかる前の僕については、みんな差別的だったし否定的だったことはある意味仕方ないことだとします。でも本当は僕たちは話がわかるわけですから、一般の人にはこちらの方をもっときちんと突き付けたいと思っています。別に喋れる普通の人間なんだから殺していいはずがないでしょという簡単な一言を僕は言いたくて仕方がありません。

この2つを上手く組み合わせるのは難しいのですが、僕の中では2つの真実ということです。言葉を喋る前の僕を大事にしてくれる心が世の中のもっとも光のような心だとすると、普通の人にはなかなかそれは難しくても、僕たちは当たり前人間なのだからそこだけははっきりと見つめてほしいということです。

出生前診断のことも僕たちは繰り返し議論してきましたが、生まれる前の命を否定する時も、生まれる前の命があまりにも誤解に満ちていて、生まれてきた人たちとずっと話をしていると、みんな同じ人間という抽象的な言い方でなくて、みんな同じように同じ言葉で物を考えている同じ人間なのだから、その人たちが生まれてこない方がいいなんていうのは単に間違った考えに基づいた人間の誤りでしかないので、そのところをどう正すかが次の時代の課題だなと僕も今思っています。

今回の事件でもう少し僕たちはこの言葉を届けられるのかと思っていたけれど、どうもそれは難しかったので改めて僕たちは僕たちの活動を続けていきたいと思いますが、さっき、H. Kさんが言ったように、でも、亡くなった人たちの名誉回復だけはしたいので、どうか誰が言ったかは別にしてみんな尊い命を生きてきたことをもっと具体的な言葉で語ってほしいなと思いました。

以上が僕が今日考えてきたことです。なかなか僕が言っているようには伝わらないと思いますが、先生がこんなことを言うことは無理ですので、そのところでどうか理解してほしいと思います。

それでは以上で僕の意見を終わりにいたします。

大野剛資

今、16時35分くらいだと聞いたので、みんな大急ぎで喋ったのでまだまだ時間があるので、少し議論を整理しながらあとでやりたいと思いますが、まずは僕の意見を述べさせていただきたいと思います。

僕が一番言いたいことはもうすでに皆さん仲間が言ったことなので、付け加えることはないと言っても過言ではありませんが、ぼくがやはり今回のシンポジウムをどうしても企画したいと主張したのは、このような言葉を持っていないとされる人間の言葉としてどうしても言葉を届けたかったからです。別にこの事件に乗ずるといような魂胆はなく、ただただ亡くなった仲間たちの魂にどうやって報いたらいいのかという思いが強かったからです。

もし、僕が被害者で僕が亡くなったあと、あの人たちは名前も伏せた方がいいし、何もわからなかった人だからそのことは触れない方がいいと言われたら、僕たちの生きた意味は一体どうなったのかということになります。幸い僕たちはこうして仲間同士でこれだけ喋れることを確認し合っているから、もし、僕たちに何かあったらお互いに仲間のことを話し合うことになると思いますが、なかなかまだまだそういう時代は来ていないので、本当に亡くなった仲間が辛くて辛くて仕方がない中、この

期間、このことを考えてきました。

その上でもう一つ言いたいことがあるのですが、僕は犯人の植松聖と一度直に話したいと思っています。それは僕たちの恨みを言うのではなくて「君の考えは間違っている」と言うことをきちんと話して、僕は実は今の時代の制度では難しいことは知っているけれど、まず、植松聖に「君の考えは間違っているよ」と突き付けて、その上でこの考えをどうか裁判所の被告席で「僕の考えは間違っていたので世の中の人その考えに惑わされないでください」と主張させてあげたいです。彼にはそれが最後に残された義務だと思っています。

仲間の誰かが書いていた僕も震え上がるような一言でしたが、「もし、このまま死刑にしてしまったら彼の言葉だけが残る」という言葉があります。それは確かに言われてみてその通りだと思ったのですが、今、日本中の人僕たちの生きる意味はあるのかどうかですごく動揺しています。さっき、純平くんが「柴田先生がビビる」と言った辺りの話ですが、みんな動揺していて、本当に僕たちに生きる意味があるのかどうかとあの被告から言われた度に、本当はどっちなのだろうかと動揺している人が世の中に沢山現れてしまったような気がします。

こうやって今日ここに来てくださる方は動揺することもないと思いますが、言葉もわからない人間がどうやって生きているのかという間違っただけの前提でものを考えさせられたら、それこそ石原都知事と同じ言葉を発せざるを得ないのではないのでしょうか。

言葉もなく自分のことをわからないという言葉を使っていると先生は説明してくださいましたが、「自分のこともわからないような障害者が生きていてもなんの意味があるのだ」という考えをやはりみんなが持ってしまったら迷路の中に入ってしまったようなものですが、実はその迷路はまやかしの幻の迷路でしかないということを僕はしっかりと明らかにしないといけないと思っています。

だから植松聖容疑者によってみんな間違っただけの迷路に入れられているのでその迷路は単なる幻ではないということを知って伝えてあげなければいけないと思っています。

その上でなのですが、僕はとても勇気のいる一言なのですが、仲間たちが口々にその次になにが必要だと言ったときに出てきた言葉が「ゆるし」と言う言葉です。僕にはまだ実感として本当に植松聖をゆるせるかどうかはわかりませんが、僕はそのことを僕の課題として考えようと思いました。

今、大きな声を出しているK. H君がこの間のきんこんの会で力強く言ったことですが、「人は一つの結論を持って主張するのではない」ということを彼は一生懸命言ってくれました。例えばというのも変ですが、植松容疑者をゆるせるかどうかについてみんな一生懸命考えてももちろんゆるせない気持ちが誰もあるのはわかりますが、ゆるせるかもしれないという気持ちが湧いてきた時に、その気持ちにもう少し目を向けて、僕たちは一体どういう社会を作ろうとしているのかということを知ることがK. H君の主張でした。

ゆるせるかどうかではなくて、僕たちはゆるせる社会を作るのか、ゆるせない社会を作るのかというふうを考えて自分の中にあるよりよいものをみんなで結集してもっと先の社会に向かっていくべきだというのがK. H君の主張だったと思いますが、言葉が随分違うので時間が余っているので、突然今K. H君に喋ってもらおうと思いました。ゆるすことの問題は社会をどう作っていくかというこの事件をさらに超えてきた大事な議論だったので、ちょっと僕はやはり上手く言えなかったのでK. H君に任せたいと思いますが、要するに犯人をゆるせるかどうかということを知りたいと思っています。

仲間の中には、ゆるすことを沢山してきた人たちがいるので自分たちはずっとゆるすことを大切にしてきたから、今度の事件だからこそ、そのゆるす気持ちをフルに動員すべきであるという意見を、

そのきんこん通信に書いている人がいます。

僕はさすがにそこまで思い切れていない人間だったけれど、仲間の中にそういう考えに辿りついて
いる人がいるということがとても誇らしく思います。だからあれ以来、ゆるすという言葉にずっとと
られ続けているというか、それを自分の課題にしてきました。

世の中の人もぜひあの植松聖をゆるすような社会が作れるのかどうかと言う問いを立ててほしいで
す。確かヨーロッパのテロリストに対してゆるすということをやったというどこかの国がありました
よね。そういうことを議論できる国もあるのだから、日本もそういうゆるせるかどうかという問いを
立てられる国になるかどうかは今回の事件ではもしかしたら問われていると考えてもいいのではない
かと思います。

それでは司会なのでたぶんいいと思うのですが、この話はK. H君に任せたいと思うのでK. H君
から「ゆるす」と言うことについて意見をお願いします。

K. H

ありがとうございます。僕はこの間、喋りたい放題喋らせていただいたので、今日はおとなしくし
ておこうと思いましたが、「ゆるす」ことについて僕なりの考えを話させていただきたいと思います。
人の心の中にはいつも暗闇と眩いばかりの世界が共存していて僕たちはその2つをずっと見つめなが
ら生きているのだと思います。今回はあまりにも悲惨な事件だし、あの憎しみを向けられるしかない
ような事件を目の当たりにすると僕たちは光の方を忘れてしまいますが、僕たちの心の中には必ず暗
闇と光がありますから、僕たちの光の心はこの事件をどう考えるだろうかというふうに考えていくと
僕はそこに「ゆるし」という言葉を見ないわけにはいきません。

僕はクリスチャンなので「ゆるし」という言葉はいつも大切にされる言葉ですが、別にクリスチャ
ンだからゆるせる問題というようなことではありません。クリスチャンだからゆるすかどうかを問い
つけられているということです。みんな同じだと思いますが、クリスチャンだからゆるすかどうかを
ひとときわ突き付けられたという意味で、別に皆さんとなにひとつ変わらないのですが、ゆるせるかど
うかという問いの前に僕はまだ答えは出ていないけど、やはり「ゆるそう」というところまで考えは
進めることができました。だから「ゆるそう」という考えをみんなで集めてそれを社会の一つの仕組
みにしていくのは正しいことではないかと思いました。

みんなが本当にゆるせるようになるまでゆるすことができないというのも一つの考えかもしれませ
んが、みんながよく分からないなら、ゆるそうという気持ちになったのならその気持ちを社会の原
理にしていくことが、社会が本当によくなるためには必要なことではないかと思っています。

だから、今回の事件もみんなの中に少しでも「ゆるそう」という気持ちがあるのならそこに光があ
るのではないのでしょうか。憎しみだけか満ち溢れるようなこの事件の中に、それでも人は「ゆるそう」
という気持ちを持つのではないかというのが、僕は人間の誇りであり、尊厳だと思うので。

植松聖さんが踏み潰そうとしたやまゆりの花のように無残な、確かに人間の存在は踏み潰されてし
まったかもしれないけれど、僕たちがそのまま植松聖さんを憎たらしいと言ってしまったら、僕たち
もまた尊厳を失いそうな気がするので、僕たちは今、ここに人間の尊厳をきちんと抱くためにも、「ゆ
るそう」という気持ちが心に湧いているならその気持ちに正直になるべきではないかと思っています。
だから、「ゆるそう」という気持ちが湧いたとしたならそこに社会が変わるきっかけがあるというのが
僕の意見です。

「ゆるせる」となったときに社会が変わるのは、僕は間違っていると思います。人は今あるものを

もとに生きているのではなくて、どう生きようとするかによって社会を作るものだと思うので、やっぱり「ゆるせる」ではなく、「ゆるそう」かどうかくらいのところで新しい仕組みを考えることが大事なのではないかと考えています。

ここまで考えるにはとても大変な時間が必要でしたが、やはりこの事件はあまりにも重い問いを突き付けてきたので、僕も何度も何度も頭を懸命にフル回転させてここまで考えることができました。この間のきんこんの会では、少し曖昧だったまま話をしたのですが、その話し合いをきっかけに、このことがくっきりとした僕の考えになって、僕はこれでこの事件の悲惨さの中に、次に繋がる一つの小っちゃな小っちゃな光を見つけたような気がしました。

亡くなられた方の魂は全く浮かばれないままになっていますが、こうして僕たちが語ることの中で少しでも亡くなった方の魂に対する本当の意味での追悼の気持ちが表現できたらいいなと思います。沢山の方々が追悼したことにもものすごく大きな意味があったと思いますが、やはり同じ立場の人間が同じ立場の人間としてものを語るの中にある鎮魂は本当の鎮魂に近いと思うので、それこそが僕は本当の意味での亡くなった人たちに捧げるレクイエムだと思っています。

以上が僕の意見です。

大野剛資

ありがとうございました。やはり僕にはちょっとと言えないことをちゃんと要くんが言ってくれたのがよかったし、これが僕たちきんこんの会の醍醐味だと言いたいくらいです。まだまだ沢山の人が少しずつ違う意見を持っていてその意見を結集すれば僕はものすごい英知になると思っているんで、本当に今日はこういう時間を設けることができよかったなと思います。

また、僕の思いつきで申し訳ないのですが、僕は今日初めて会った当事者の人に聞くのは少し無茶かも知れないけれど誰か会場の当事者の人の話を聞きたいと思うのですが、先生の目に留まったのは誰ですか。(この直線上にいるのはK. Tさんだったので)じゃあ、K. Tさんならまた新しいことを言ってくれそうなので、K. Tさんは僕たちの中では普通に喋れる障害の人ですが、そのことは僕たちとは関係なしに一緒にいつもものを考えてきた人なので、K. Tさんは僕たちと一つ違うのは自分で情報収集ができるので、今回の事件に関しては一番詳しいので、その辺のことも含めてK. Tさんから一言言っていたら時間が押してくるのかと思います。K. Tさんに意見を求めたいと思います。それと奈苗先生にお願いですが、誰かこの中で喋れる人を一人探しておいてください。

K. T

それでは僕の方から話させていただきますが、言いたいことは全て言われたと思います。だから僕から付け加えることができることはあと一つくらいです。それは僕たちは僕たちの手でやはり追悼したかったということです。この間のきんこんの会するときにとっても先生が興味深いと言ったら失礼ですが、町田市の障害者青年学級では、津久井やまゆり園から5キロしか離れていない山奥の闇の中でキャンプファイヤーの時間のあとに追悼の19本のローソクを灯したという話を聞いたのですが、そういう静かな静かな追悼がもしかしたら日本のどこかでやられているのかも知れないので、そういう本当の追悼に世の中の人は目を向けてほしいということです。

先ほど、仲間が作った詩のことが出てきましたが、本当に僕たちは心から仲間を追悼したいと思っているので、僕はその暗闇の中に灯った19本のローソクのことが頭の中でずっと輝き続けていて、本当の追悼はやはり本当の仲間できれないのだなと思いました。

僕はその仲間たちのことは1回目のこの研究会で歌を歌ってくれたときしか知らないのですが、みんな、こういう言い方をしているのかわかりませんが、絶対に世の中からは見捨てられ続けた知的障害の人たちが、堂々と「私たち抜きに私たちのことを決めないで」と歌で言っているのを聞いて、身が震えるような思いがしましたが、そういう人たちがまた自分たちにだけできる追悼をしたということが心から打たれることでした。

たぶんどこかで誰かがそういう追悼しているのではないかと思うので追悼している人たちは別にそれを紹介してもらおうと思っているわけではないと思いますが、そういう本当の追悼がどこかでやられているということを少しでも世の中の人に伝えたいなと思いました。

以上が僕がまだ話されていないなと思ったことで言ったことですが、今日は仲間の意見がいつも以上にきちんと話されているのは聞いてすごく思いが打ち震えるような思いで聞いたので、本当にこの言葉は今使わないかも知れませんが、この言葉はきちんと文字にして何年か経ったときにこういう考えがあつたのときにあつたのだと言うことが振り返られたらいいと思います。

以上です。

大野剛資

初めての人になります。信じられないかも知れませんが、今日はいきなり彼の手を取って話してもらいます。よろしくお願いします。

K. K

K. Kと言いますが、初めて書いているのでびっくりですが、もちろん一人でずっと練習してきましたから書けるのは当たり前ですが、あまりにも皆さんが力強い発言をしたのにとっても勇気づけられました。僕はあの事件からはずっと目を反らして今日まで生きてきました。あんな悲しい事件を話すのはとても辛いし、両親と言うか家族もみんなあのニュースが流れると他のチャンネルに回そうとするくらいそのことを直視するのが嫌でした。別に逃げたつもりもないけれど、やはり救いようのない事件だからどこにも救いがないと僕は思ったのですが、まさか仲間がこうやって話しているとは夢にも思わなかったので、ここまでみんなが話せることに僕はとても感動したし、そうやって前を向いて生きていくことこそが大切なのだということを今実感しました。

実際にあの犯人に会えるかどうか分かりませんが、僕もどうかこの言葉をあの心の荒んだ犯人に届けてあげて、世の中はもっと美しいということを伝えてあげられたらいいと思ったし、僕はよく分からなかったけど本当にやまゆり園の人がここ来たんですね。それも驚きですが、なんだか突然目の前にもう一度あの悲惨な事件が浮かんでくるのが怖いですが、もう一度自分の目で事実をよく見て考え直してみたいと思います。何もわからないと言われ続けてきた僕が初めてこのようにして話すのは、問題があまりにも大き過ぎるのですが、以上が僕が考えた意見ですが、これからはこういう仲間たちと真剣に議論して、先ほど鈴木先生の話の中で僕はやっぱり下を向いていたのかも知れないと思ったので、仲間と一緒にしっかりと前を向き、顔を上げようと思いました。

以上です。

大野剛資

とても無茶なことをして申し訳ありませんでしたが、やはり当事者のもう一つの意見として僕はまた胸を打たれた気がしました。僕たちは出生前診断の問題があるとみんなで議論し、臓器移植のこと

があるとみんなで議論をするということを繰り返してきたので、なにかあるたびにまたみんなで話し合おうという気持ちになれたから、事件から目を反らさずにきましたが、やはり一人でこの問題に立ち向かえたかというそれは難しかったかも知れません。僕たちには仲間たちがいつもいるからこの事件を直視できたので、やはりこうして仲間がいるということがとても喜びを覚えずにはられません。僕たちの誇りとか力強さはこの事件を語るには少し相応しくありませんが、この事件から目を反らさずに今、僕たちがいることができることを僕たちは誇りに思いたいし、このことをどのような形で伝えられるのかは皆目見当が付きませんが、なんとかして世の中にこういう言葉が伝わるというなと思っているところです。ちょうどいい時間になったので、これで僕たちのシンポジウムは終わりにさせていただきたいと思います。なかなか重たいテーマをどのようにお聞きになったか分からないのですが、なかなか語りえないテーマを今日は話させていただいてありがとうございました。